

## 「引喩」の政治性

～ロマン主義時代の女性詩における感受性言語と「公共圏の不安」\*

大石 和 欣<sup>1)</sup>

### ‘Politics of Allusions: The Language of Sensibility and the Anxiety of the Public Sphere in Women’s Poetry during the Romantic Period’

Kazuyoshi OISHI

#### ABSTRACT

This short essay investigates into the ways in which allusions function in women’s poetry during the so-called Romantic period with political implications. Christopher Ricks’s *Allusions to Poets* (2002) offers a revised map of intertextuality in English poetry, but it covers only poems in the male poetical tradition, ignoring the vast field of intertextuality in female poems. Besides, he entirely overlooks the ideological implications embedded in poetical allusions. Women in the eighteenth century had little established literary tradition to inherit. It was in parallel with the situation in which they were excluded from legal rights to inheritance or personal property. It does not mean, however, that women’s poetry has no intertextuality. On the contrary, within the culture of sensibility, female poets began to explore the possibility of creating their own unique poetical styles and languages through poetical allusions. Since they considered themselves unqualified to make open commitments to the ‘public sphere’, they sought to include not only personal, but also social and political messages in various allusions to texts and contexts. It was an innovative style of commitments to the ‘public sphere’. This paper explores the complicated ramifications of the poetical allusions which carry political implications around them.

#### 要 旨

本論考はいわゆるロマン主義時代における女性詩において、引喩が政治的な意味をもちながらどのように機能したのか、その多様な形態を探るものである。クリストファー・リックスによる『詩人への引喩』(2002年)は、英詩における間テキスト性の地図を書き換えたものだが、男性詩の伝統の中で吟味しているにすぎない。女性詩における広大な間テキスト性の領域を無視している。また、詩的引喩に埋め込まれた引喩のイデオロギー的な意味についても看過している。18世紀の女性は、ちょうど遺産相続や財産権から排除されていたと同様に、相続できる確立された文学的伝統があったわけではなかった。しかしながら、だからといって女性詩に間テキスト性がないということにはならない。それどころか、感受性文化の枠組みのなかで、女性たちは詩的引喩を用いながら、独自の言語とスタイルを作り上げる可能性を探り出していったのだ。おおびらに「公共圏」に参加する資格がないことを自覚していた彼女たちは、さまざまなテキストや社会的文脈にたいする引喩の中に、個人的なメッセージだけではなく、社会的・政治的メッセージを含みこんでいったのである。それは新しい形の「公共圏」への参加なのである。「公共圏」へ参加しようと試みながら、政治的メッセージを抱えた詩的引喩が錯綜して生み出す効果について明らかにしてみる。

#### I

アナ・リテシヤ・バーボールド (Anna Letitia Barbauld) がS. T. コウルリッジ (Coleridge) と初め

て会ったのは1797年、共通の友人ジョン・プライオー・エスリン (John Prior Estlin) の家においてのことだった。当時のコウルリッジは、バーボールドやエスリンが属するユニタリアン派の政治信条に共鳴し、少なくとも表向きは熱中していた。その後しばらくの

<sup>1)</sup> 放送大学助教授 (「人間の探究」専攻)

間二人は親交を重ねるが、コウルリッジはバーボールドの「素晴らしい精神的節度」と「分別ある理性」に敬意と同時に驚異を感じる<sup>1</sup>。実際、バーボールドはコウルリッジに好意を抱く一方で、優柔不断で自己破滅的な彼の性格を見透かしていた。彼女が彼にあてて書いた詩「S. T. コウルリッジ氏へ」(‘To Mr. S. T. Coleridge’, 1797) はそうしたコウルリッジに対する揶揄にほかならない。詩は寓話の形式をとる。「知識の丘」(‘the hill of Science’, 1) を登る途上で霧が立ちこめる森の中に迷いこみ、「深遠なる哲学の／衣」(‘the garb / Of deep philosophy’, 20-1) を身に纏った「怠惰」(‘Indolence’, 19) が居座る芝生の上で心空ろに夢見続けるといふものだ。それは、コウルリッジの冥味な詩と怠慢な性格に向けられた痛烈な皮肉である。

この詩が直接の引き金となったというわけでもないが、コウルリッジも黙ってはいなかった。ユニタリアン派から身を引いて久しい1812年、ミルトン(Milton) についての講義をしている最中に突如この女性詩人をこき下ろしはじめた<sup>2</sup>。バーボールドの「満足の頌」(‘Ode to Content’) に出てくる「茶色の村」(‘brown hamlet’, 37)、「苔、バラ、スミレの花々が周りに咲き、／谷には百合が」(‘Moss rose and violet, blossom round, / And lily of the vale’, 41-42) という描写が滑稽だといふのだ。この詩句には「真実の感情」(‘genuine feeling’) が欠落しているというワーズワース(Wordsworth) の批判にも言及することで、自らのバーボールド批判を権威づけさえする<sup>3</sup>。聴講していたヘンリー・クラブ・ロビンソン(Henry Crabb Robinson) は、尊敬するロマン派男性詩人が壇上から敬愛するユニタリアン派の女性詩人を非難するのを聴いて驚き、戸惑う。ワーズワースが指摘するように、コリンズ(Collins) の「そして夕日に染まる村々、おぼろげに見ゆる教会の尖塔」(‘And hamlets brown, and dim-discovered spires’, *Ode to Evening*, 37) と比較すれば確かに拙劣かもしれないが、「夕日に染まる村々」(‘brown hamlet’) は黄昏時の村の描写であり「満足」の風景として適切だと、密かにロビンソンは日記の中でバーボールドを擁護する。

互いに引喩を用いながら展開されたバーボールドとコウルリッジのこの対立は、個人的なレベルで片付けられるものではないだろう。ジェンダーや宗教や歴史を包摂したイデオロギーを根底に潜在させながら、この時代の女性詩人が一般的に抱えた問題を照射しているように思う<sup>4</sup>。バーボールドの詩の「知識の丘」がバンニャン(Bunyan) の『天路歷程』(*Pilgrim's Progress*, 1678) で出てくる「困難の丘」(‘the Hill Difficulty’) の引喩であることを考えても、またコウルリッジの宗教的立場の推移、ロビンソンのバーボールド擁護に同じユニタリアンとしての動機が働いていることを考えても、宗教的な要因は否定できない。一方で、コウルリッジやワーズワースが「真実の感情」というロマン主義的美徳の欠落を理由にして、またコ

リンズの著名な詩との比較に基づいて、バーボールドの詩を批判したことは、ジェンダーと文学的伝統が19世紀初頭においても女性詩人の直面する大きな障害であったことを示唆していると言えよう。

18世紀後半から19世紀前半にかけての女性たちは、文学という公共圏の一領域に読者として、そして作家・詩人としても参入を図るが、その際に必然的に男性中心的文学伝統との軋轢を引き起こすことになる。女性たちは公共の場で詩論、文芸批評や政治論を著すことをはばかった。やむをえない場合は、匿名記述という選択肢を選ぶ。さらにもう一つの女性に許された批評言語が、広い意味での「引喩」であったといえよう。特に女性詩人は、引喩を通して男性詩人や同じ女性詩人に批評的な言及を行い、そうすることで不安定かつ不分明な自己の位置を確認していく。そこには不可避的にジェンダーと政治的・社会的なイデオロギーが入り込んでしまう。本論考では、ロマン主義時代の女性詩人が、広い意味での「引喩」をどう政治的な文脈で機能させているかを考察する。そこから、彼女たちが直面した歴史的問題と不安の性質が浮かび上がってくるだろう。

## II

『詩人への引喩』(*Allusions to Poets*, 2002) において、クリストファー・リックス(Christopher Ricks) は引喩に一種の「詩人による詩人論」の力学を見出しているが、それは詩人が引喩を用いることで自らの言語的欠乏を認め、他者の言葉を借用しながらも、脱構築的に独自の意味を作り出していくからだ<sup>5</sup>。そこには依拠と造反の両方の作用が働く。結果として、引喩は異なる文学的伝統や言語から生まれた多種多様なスタイルを混交させた「異種共存言語体」(heteroglossia) として生き続ける<sup>6</sup>。だがリックスが論じる言語体は、結局のところ男性中心的であり、18世紀擬古典文学の引喩を形容する際に父から子(father-son) への遺産相続の比喩を使うことで、論理のイデオロギー的綻びを露呈する。

[18世紀において] 結婚時の財産譲与制度が確立したことは、オーガスタン文学の文学的遺産相続の形態と相通じている。<sup>7</sup>

確かにドライデンにしろ、ジョンソンにしろ、またポウプにしろ、ユウェナリスやホメロスといった古典からシェイクスピアなど過去の文学的遺産を相続しているし、ことロマン主義男性詩人にいたってはシェイクスピアやミルトンから多大な遺産を相続する。

しかし、18世紀になって登場する女性文学にはこの遺産相続の比喩が適用できない。もちろんシェイクスピアやミルトンへの言及は18世紀の女性文学には少なくない。しかしながら、その相続できる容量は男性に比べればはるかに限定されたものであった。ブラック

トーン (Blackstone) が『イングランドの法律注解書』(Commentary on the Laws of England, 1753) において注釈し、ウルストンクラフト (Wollstonecraft) が『女性の権利擁護論』(A Vindication of the Rights of Woman, 1792) で憤るように、少なくとも19世紀半ばまでは女性の財産は父系社会の中で概して法的に認められていなかったし、それは文学的実情でもあった<sup>8</sup>。女性が相続したり、使ったりできる独自の詩的遺産は確立されていず、彼女たちは自ら新たな文学的伝統を築き上げていくことからはじめざるをえなかった。そして、女性にとって固有の文学的伝統が存在しないことが、18世紀において女性が文学という公共圏に入り込もうとしてもそこからはずき返されてしまう大きな壁として立ちはだかっていた。

19世紀初頭になっても依然としてその壁は確固として存在していた。例えば、バーボールドが『一八一二』(Eighteen Hundred and Eleven, 1812) を著し、新古典的な「進展詩」(progress poem) の形式を借りて英国滅亡という衝撃的な歴史的予言をしたとき、男性批評家たちは女性詩人が歴史と予言という男性領域に公然と割り込んできたことに憤慨した。ジョン・ウィルソン・クロッカー (John Wilson Croker) は女性詩人が「ヨーロッパの利害」を解釈しようとしたことを傲慢だとして非難し、『ユニヴァーサル・マガジーン』(Universal Magazine) は「冷酷な規律」と「正義の厳格な遵守」というユニタリアン的な特徴に露骨な反感を示し、また『エクレクティック・レビュー』(Eclectic Review) も「完全に冷静さを保って」文明の末路を予言するなどとは正気の沙汰ではなく、非常識で「異常なほど不感症」でさえあると揶揄する<sup>9</sup>。そうなるに必然的に女性の詩作活動は私的・家庭的な領域に押し込められてしまうことになる。18世紀に出されたジェイムズ・フォードイス (James Fordyce) やジョン・グレゴリ (John Gregory) の女性作法指南書では、女性が政治や歴史を語ることを戒めているし、「女性詩人」(‘The Poetess’, 1828) においてメアリ・ブラウン (Mary Browne) が美しく、しかし哀しく謳ったような繊細で内的な女性詩人像が定着してしまう。女性詩人の言葉は個人的かつ家庭的な言語ゆえに甘美であり、太陽の光が届かない海中洞窟で「光り輝く宝石のような感情」(34) ゆえに優れたものである、と慰めるのだ<sup>10</sup>。

とすれば、女性詩人にとっては「影響の不安」よりも、いわば「公共圏の不安」が大きいと言えはしないだろうか。文学的遺産の欠落という負の境遇の中で詩作する恐れと戦き、それゆえに抱く作品の受容についてのさらなる不安が彼女たちの心には重くのしかかっていたのだ。リックスも、巨大で男性的な文学伝統の影響を論じたウォルター・ジャクソン・ベイト (Walter Jackson Bate) やハロルド・ブルーム (Harold Bloom) も、またロマン主義におけるシェイクスピアの創造的・生産的影響関係を示唆したジョナサン・ベイト (Jonathan Bate) も指摘していない、

全く異質の不安がロマン主義時代の女性詩人の言説の裏にまっ暗な深淵をのぞかせている<sup>11</sup>。読者層の急速な拡大と文藝共和国 (the republic of letters) の重層化の時代においては、ルーシー・ニューリン (Lucy Newlyn) が論じる「受容の不安」も重要な問題であり、それも含めながら私たちは女性詩人と文学的伝統との不安定な関係を社会的に解きほぐしていく必要があるのだろう<sup>12</sup>。

それでも「公共圏」のなかで認められるために、女性詩人たちは男性と異なる女性独自の文学領域と固有の文体を確保しなくてはならなかった<sup>13</sup>。この時代の女性すべてを一般化すべきではないが、中流階級女性が理想とする文体に関して言えば、バーボールドの「女性の文章について」(‘On a Lady’s Writing’, 1792) やウルストンクラフトによるヘレン・マライア・ウィリアムズ (Helen Maria Williams) の小説『ジュリア』(Julia, 1790) 批評に典型的に素描されている。バーボールドが「均整」(1)、「落ち着き」(1)、「しっかりとした判断力」(3)、「規則正さ」(4) を女性的文体の理想的美徳として掲げるところには、男性的といってもいい非国教徒らしさがうかがえるが、「上品さ」や「磨かれた」姿、「優雅さ」とマナーを重視しているところ、またウルストンクラフトがスマスの文体に「女性的な美しさ」、「しとやかさと寛容さ」、「謙遜」や「洗練された感情」を重視しているところは、「上品さ」(‘politeness’) を美徳とする18世紀中流階級意識をちらつかせつつ、男性文学とは異なる女性独自の文学的伝統を形成しようとしている姿が垣間見える<sup>14</sup>。

### III

女性詩人にとって公共圏との軋轢を回避しながらこの上品な女性的文学伝統を構築し、受容の不安をも解消してくれる都合のいい美徳の一つが感受性 (sensitivity) だった。イギリスの経験哲学・道徳哲学によって体系づけられ、中流階級を主軸とした社会経済の活性化と繁栄の中で「上品な」社交性・社会性を示す美徳としても賛美された感受性は<sup>15</sup>、「情操」(sentiment)、「憐憫」(pity)、「共感」(sympathy)、「仁愛」(benevolence) を主題とするフィールディング (Fielding)、マッケンジー (Mackenzie)、スターン (Sterne)、ゴールドスミス (Goldsmith) らの小説群、グレイ (Gray) やコリンズなどの詩作品を生み出していった。その一方で感受性は、生来的に感覚が鋭敏であると考えられていた女性にも見出されていく<sup>16</sup>。ハナ・モア (Hannah More)、ヘレン・マライア・ウィリアムズ、メアリ・ヘイズ (Mary Hays) らの感受性をテーマにした詩は、感受性が18世紀女性詩の根源的要素であり動機であると同時に、詩作品を公に発表することを許してもらえない不可欠の口実であることを暗示している。感受性を媒介にすることで女性たちは、odesやsonnetsなどの形を借りた数多くの詩作品や、ゴシック・ロマンスを含む感受性小説を出版

し、文藝共和国に参入していったのである。ワーズワースが16歳で初めて活字にした詩「悲痛な物語に涙するヘレン・マライア・ウィリアムズを見て」(‘On Seeing Miss Helen Maria Williams Weep at a Tale of Distress’, 1786)は、ロマン主義詩人による女性詩人論ともいえ、こうした女性の感受性詩がいわゆるロマン派詩の密かな源泉になっていることを示している。

公共圏の周縁に位置づけられがちな女性詩人たちが、彼女たちの感受性言説から政治性や社会性が抹消されているわけではない。女性の感受性は慈善という社会的美德に変質することで政治性と社会性を付与される。シャーロット・スミス(Charlotte Smith)の「死せる物乞い」(‘The Dead Beggar’, 1792)は、「物乞い」に関するイメージや「引喩」がジェンダーと歴史の問題を包摂して「異種共存言語体」(heteroglossia)を構築していくプロセスを提示している例だ<sup>17</sup>。ある物乞いの用いを目撃したことから書かれたこの哀歌は、「感受性」文学の常套句を並べた書き出しや、「死よ、万人に平等なるものよ」(‘Death, the Leveller’, 15)という常套表現からも、文学的伝統の範疇内に許容された「哀歌」として受容されることが意図されていたことが推測できる。しかし、実際のところこの詩が書かれた1792年という時代状況において、物乞いや貧民への同情それ自体が、フランス革命の自由・平等・博愛の精神と呼応する政治的意味を持ちえた。特に「冒涇された人間の権利を死が擁護するのだ」(‘Death vindicates the insulted rights of Man’, 20)という詩句は、同時代の人間にとって即座にトマス・ペイン(Thomas Paine)の『人間の権利』(*Rights of Man*, 1790, 1792)を想起させる急進的な引喩である。この引喩によって、女性的感受性が底に流れる「哀歌」であるべき詩は突如として赤裸々な政治的メッセージにすり変わってしまう。1797年版の註においてスミス自身この詩が人々を不快にさせたことを認めているが、それは女性詩人が「哀歌」という形式を表看板にして政治的領域に参入したことに対する人々の一般的反感とも受け取れる。たとえそこまでスミスが政治的意図を持っていなかったにせよ、「人間の権利」(‘rights of man’)という言葉に絡みついた政治的な意味に彼女自身が気づかなかったはずはない<sup>18</sup>。

1790年代においては、「人間の権利」という言葉だけでなく、「物乞い」というイメージ全てが引喩として機能する。「運命に翻られた追放者ではあったが、／貧しき荒徑を辿って彼は人生の行程を全うしたのだ」(‘tho’ an outcast spurn’d by Fate, / Thro’ penury’s rugged path his race he ran’, 17-18)というスミスの詩句は、バーボールドの「貧しき人々へ」(‘To the Poor’, 1795)にある「こらえよ、不当な仕打ちを我慢せよ、運命の時を全うせよ、／権力の足の下でお前の従順な首を垂れて」(‘Bear, bear thy wrongs, fulfil thy destined hour, / Bend thy meek neck beneath the foot of power!’ , 11-12)や、スミスが註

で言及しているロバート・サウジー(Robert Southey)の「貧民の葬儀」(‘The Pauper’s Funeral’, 1797)にある「愛されることもなく、友もなく、お前は歩み続けた。…／絶望し、困窮に打ちひしがれ、／果てしなく広がるこの世の荒野をさまよう」(‘Unloved, unfriended, thou didst journey on . . . / Abject of thought, the victim of distress, / To wander in the world’s wide wilderness’, 14, 21-22)の中にこだましている。少なくともバーボールドはスミスの詩句を知っていたらうし、そうでないにしろ「物乞い」のイメージには政治的な意味が含まれていることは共通の認識であった。とはいいながらも、これらの詩の間には微妙なズレも潜在することにも気をつけなくてはならない。バーボールドはスミスと同様に来世での安らぎを祈念するが、貧民を圧迫する政治的・社会的要因に対してより露骨に憤りを表現する。サウジーの詩も内容的にはスミスの詩に酷似しつつも、詩句・リズムにおいては意識的に男性化しようとしている痕跡を留めている。

サウジーの詩だが、実はこの詩はワーズワースが当時書き進めていたはずの「老人巡歴」(‘The Old Man Travelling’)や「カンバーランドの老物乞い」(‘Old Cumberland Beggar’)をも意識して書かれている。サウジーがこれらの詩を原稿段階で読んだという確証はないが、その存在は周知のものだった。反対にワーズワースはおそらくはスミスの詩を、そして少なくともサウジーの詩を、『抒情民謡集』(*Lyrical Ballads*, 1798)の出版前に読んだと思われる。「老人巡歴」ではスミス、バーボールド、そしてサウジーの詩句と呼応するイメージを引喩として提示する。

生垣の小鳥たちは、  
道で餌をついばみながらも、彼に目もくれない。  
彼は歩み続ける。彼の相貌、歩み  
そして速度も、同じ調子。(1-4)<sup>19</sup>

「カンバーランドの老物乞い」においては、孤独に彷徨し続ける同じような物乞いのイメージ、さらに彼が死ぬことで永遠の安息を得るというモチーフをも借用しながらも、物乞いに神性を付与し、象徴的存在にすることで、男性ロマン主義的な「物乞い」の詩を審美的にも、道徳的にも完成する。

そして、終には、  
自然が見守る中で彼は生きてきたように、  
自然が見守る中で彼を死なせてあげよう。(195-97)

来世ではなく「自然の法」(‘Nature’s law’, 73)における安息を祈念することで、ワーズワースの物乞いは引喩として、サウジーの物乞いに対して、さらにはバーボールドの物乞いに対しても、批判的な距離を取っているのである。

しかし、ワーズワースの「物乞い」が引喩として言及しているもう一つ重要な原典がある。それはメアリ・ロビンソン (Mary Robinson) の「老いた物乞い」(‘The Old Beggar’, 1796) である。ワーズワースの物乞いが象徴的存在になっているのに対し、ロビンソンは「物乞い」を感受性の領域に留めたまま、彼に人間性と歴史性を吹き込む。彼は戦場で「憐憫の涙」に咽び、片腕を失って帰国すると、長年思い続けた恋人を奪われたことを知る。彷徨する彼の姿には、恋に破れた男が抱える世俗の悲哀が宿る。

彼の姿を見てごらん。齢と悲哀に打ちひしがれ、  
ゆっくりと門扉を開き、ため息をつく。  
苦悩でしばんだ胸に大粒の涙が落ちる、  
彼の目から大粒の涙がほとほと落ちるのだ<sup>20</sup>。

ワーズワースの超人間的、象徴的物乞いは、この詩では涙を流す失意の男に変貌している。女性感受性文学にありがちな憐憫を誘う人間像でもある。ワーズワースの詩はロビンソンへの「引喩」をそこかしこにちりばめながらも、男性的な「物乞い」のイメージに置き換えている。一方で、ロビンソンはスミスやバーボールドらと同じく女性的な感受性文化の枠組みの中で、本質的にワーズワース、あるいはサウジーの詩とは異なるイメージとメッセージを埋め込んでいたといえる。ロマン主義時代の女性詩人と男性詩人が、政治的なイデオロギーを絡めながら引喩と形象を通じて相互に批判と造反を繰り返していく過程をここに辿ることができよう。

#### IV

バーボールドの「ネズミの嘆願」(‘Mouse’s Petition’) も、感受性の美德を掲げた女性による重要な政治的引喩が機能している例である。1767年にジョゼフ・プリーストリー (Joseph Priestley) 家を訪問した際に、バーボールドは実験室で籠に囚われたネズミを見つけ心を痛み、即座に囚われの身を嘆くネズミが自由を求めるこの詩を書く。動物愛護は感受性文化の表徴の一種であるが、現代の動物愛護運動を想起しそうなほど苛烈に解放を要求するネズミの言葉には、複数の意味が込められている。まず第一に、宗教的感受性を欠いたプリーストリーのソツイーニ主義への反発がある。知性豊かなユニタリアンとはいえ、男性ユニタリアンに顕著な「論争好きな気質」や、「感じる」ことを完全に否定した理性的信仰には疑いの目を向けていたバーボールドにとって、キリストの神格を全面的に否定するプリーストリーのソツイーニ主義は、「抽象的」で「冷たく、情味にとほしい」、いわば「寒冷地帯のキリスト教」であり、魂を魅了する宗教的熱意が欠如しているように思われたのである<sup>21</sup>。つまり「ネズミの嘆願」は動物愛護という形を借りてあらわれた18世紀的な感受性、さらにいえば女性の感受性文

化、そして感受性を基盤にした信仰心の称揚と擁護でもあるのだ。しかし、その一方で、自由を擁護すべき非国教徒として動物実験するのは道徳的矛盾であるという政治的メッセージをも包含する。フランス革命の余波により政治改革運動が高まる1790年代前半には、この詩は、非国教徒の法的差別撤廃や圧制からの国民の解放という政治的メッセージとして政治パンフレットに頻繁に引用され、広く人口に膾炙するにいたる<sup>22</sup>。

同じく感受性やその派生としての慈善心を動機として書かれた奴隷貿易廃絶のための女性詩は、一種の引喩として共通する詩句を埋め込むことで、女性独自の巨大な言説群を構成し、それゆえに一種の修辭的伝統を築き上げることになった。奴隷貿易廃止運動は、18世紀末から19世紀初頭にかけて、中流階級女性知識人が宗派の区別なく押しなべて積極的に関与した慈善運動であり、他の慈善事業・運動と同様、彼女たちが行動としてもまた知的活動としても「公共圏」に参加する口実でもあった<sup>23</sup>。1789年、次いで1791年の国会でウィルバーフォース (Wilberforce) が国会演説をし、奴隷貿易廃止法案可決を図るが、僅差で否決される。社会的波紋が広がり、失望や憤怒を表す詩や散文が女性によっても書かれる。バーボールドの書いた「奴隷貿易廃止法案否決について、ウィリアム・ウィルバーフォース氏に宛てた書簡詩」(‘Epistle to William Wilberforce, Esq. on the Rejection of the Bill for Abolishing the Slave Trade’, 1791) は、国教会福音派ウィルバーフォースの勇気と博愛を賞賛することで、男女というジェンダーの差を乗り越えると同時に、国教会と非国教の諸宗派の壁を乗り越えた二重の意味での領域横断性をもっている。

宗教的にも政治的にも色合いを違えながらも、女性たちは囚われの身になった黒人女性、あるいは夫や子供たちと引き裂かれた女性の悲しみを感じ性言語を用いて描写する。ハナ・モアの「奴隷制度～詩」(‘Slavery, A Poem’, 1788) では感受性言語に福音主義的言語が混入されているし、アン・イアズリー (Ann Yearsley) の「奴隷貿易の非人道性についての詩」(‘A Poem on the Inhumanity of the Slave-Trade’, 1788) は恩師モアに倣い女性的感受性言語を用いながらも、宗教色を消去する。メアリ・ロビンソンの「黒人の女の子」(‘The Negro Girl’, 1800) は人種差別の問題まで掘り下げて黒人の女の子の苦悩を語る。ヘレン・マライア・ウィリアムズは、1784年に『ペルー』(Peru) でいち早く奴隷貿易への関心を詩に織り込み、1788年に奴隷貿易廃止法案の準備がはじまった際に『奴隷貿易制限のための法案通過についての詩』(‘A Poem on the Bill Lately Passed for Regulating the Slave Trade’, 1788) を書いて、奴隷貿易の完全廃止を阻止した人々の不道徳性を非難した。鎖をかけられ、死んでいく子供を目の前にして泣き叫ぶ女性奴隷の苦悩を、感受性言語により劇的に描写する。彼女は女性による詩的雄弁が国家的規模で「共感の激しい痛み」(‘throb of Sympathy’, 323) を換気することを期待

したのである<sup>24</sup>。

『マンズリー・レビュー』(*Monthly Review*)は、こうした女性による一連の奴隷貿易廃止に関わる「共存言説群」が、女性の「優しい感受性」にもとづき、「政治的、商業的、あるいは利己的な思惑をまじえることなく高潔な憐憫を純粹に表現したもの」として讃えるが<sup>25</sup>、実は女性たちにとって奴隷貿易が女性差別の問題と重なり、さらにそれが女性の政治的抑圧とも絡んでいるのである。エリザベス・ベントリー(Elizabeth Bentley)は、奴隷貿易廃止をフランス革命のような自由を保障する政治革命のごとくとらえ、イギリスの『『自由』の志士』が「下劣な『抑圧』の手」から、抑圧者の前で「震えるばかりの無力に苦しむ人々」を救うべきだ、と高らかに唱える<sup>26</sup>。メアリ・バーケット(Mary Birkett)もまた、貿易・通商が富を社会にもたらすと同時に、奢侈による人倫の腐敗もたらすという二面性があることを指摘し、奴隷の自由と権利は「人間の権利」として訴える<sup>27</sup>。いずれの詩も、奴隷の苦悩は、女性の苦悩、そして抑圧されている全ての人々の痛みと重ねあわされて、自己利益のみを図る抑圧的権威への非難となっている。

## V

奴隷貿易廃絶運動に際して築かれた女性詩の言説群はお互いに引喩を通して呼応しているが、その根底においてかすかな軋みを孕んでいることも見逃すわけにはいかない。バーボールドの詩を送られて読んだハナ・モアは感激しかつ同調する。しかし、お礼の返事とともに同封した詩の一つに含まれていたのが、国教会が次第に寛容になっていくことを謳った詩「ボナー主教の亡霊」(*Bishop Bonner's Ghost*, 1789)である。モアから見れば、国教徒とユニタリアンを含む非国教徒が手と手を携えていこうというジェスチャーのつもりであったはずだが、1790年に非国教徒に対する法的差別を撤廃する法案が否決された以上、バーボールドにとっては国教会が自由と寛容を体現しているなどとは笑止千万であった。「ボナーの亡霊に対する主教たちの弁明」(‘The Apology of the Bishops, in Answer to “Bonner’s Ghost”’, c.1791)において、バーボールドはモアの「ボナー主教の亡霊」の引喩を用いて、モアの鷹揚で自己欺瞞的な態度を批判する。

政治改革に同情する女性の間でも確執はある。ウルストンクラフトは『女性の権利擁護論』において、バーボールドの「画かれた花を手にした女性に」(‘To a Lady, with Some Painted Flowers’)を、感受性言語が言説を非政治化し、女性の知性を抑圧してしまった例として取り上げて非難した<sup>28</sup>。バーボールドの詩「女性の権利」(‘The Rights of Woman’)は、おそらくこうしたウルストンクラフトによる批判に対する反駁である。ウルストンクラフトの著作を言及しながらも、まったく異なる女性観を呈示する。出だしはウルストンクラフトの議論に沿うかのように、女性の男性

に対する優位を高らかに謳いあげることが、最後の二連にいたって女性は怒りや傲慢さや野心を抑え、男性と「別々の権利」を要求するのではなく「自然が教えるように」お互いを愛するべきだと論点をすり替える(31-32)。バーボールドは引喩を通して明確に自分の立場をウルストンクラフトと区別し、自分なりのフェミニズムの定義を試みているのである。エリザベス・モンタギュー(Elizabeth Montague)が1786年に文学を中心にした女学校を設立すべくバーボールドを誘ったとき、男性と同等の教育を受けた自分は例外であり、そうした教育は女性を男性にとって「いい妻やふさわしい伴侶」に育てることにはならないとして断っている<sup>29</sup>。そうした逸話からも、バーボールドのウルストンクラフト批判は理解できる。女性詩人の間で交錯する引喩は、共通の主題や引喩を通じて言説群を構築しながらも、微妙に異なる温度差を保っているのである<sup>30</sup>。

しかし、同時代の男性批評家側から見れば、こうした微妙な色合いの違いは差異として認識しない傾向が強い。1790年代の緊迫した政治情勢において、「感受性」、あるいはそこから派生した「慈善」(charity)や「博愛」(philanthropy)の名を語って、政治に口を挟み政府に反対する女性詩人や女性作家は、『反ジャコバン派』(*Anti-Jacobins*)に組する人々によって、十把一絡げにされ、揶揄と嘲笑の対象とされてしまう。こうした保守・体制派の男たちは女性作家の感受性は性的なものとして揶揄し、感受性を楯にして著作を出版することは裸同然で公衆の面前に自らを曝す破廉恥な行為であり、女性たちの科学への関心、特に植物学への関心にも性的な動機が働いていると揶揄する。リチャード・ポルウィール(Richard Polwhele)の『性を失った女性たち』(*The Unsex'd Females*, 1798)は、もっとも辛らつかつ典型的に女性詩人を嘲笑する。

不浄な欲望に燃えるその器官を解剖し、  
刺激的な肉体をいとしげにみつめる。  
崇高さをましていく自由の展望とともに、興奮し、  
王国の廢墟の上に、険しい顔をしてたたずむ。  
そして、民主主義の嵐のさ中、狂乱状態で  
哲学を追究する！ お前の妄想の影を<sup>31</sup>。

この詩行にはポウプやヴェルギリウスの引喩も織り込まれている。そうすることで、ポルウィールは文学的伝統という権威を笠に着て、女性詩の野卑さと卑属な政治的野心を嘲笑しようと意図しているのである。

## VI

詩人が他者の言葉を借りて自己を語る修辞としての引喩は、単に直線的かつ一方的な修辞にとどまらず、同時代において双方向的かつ重層的な間テクスト性を持った特殊な形式の詩論、文芸批評、政治批評として機能しうる。散文による詩人論が意図と論点とを見かけ上は表出させているのとは異なり、詩という形式によ

る言及や引喩を通じた詩論や批評は、密かに他者を讃え、あるいは貶め、自己を主張しながら、錯綜するイデオロギーを包摂する。文学的伝統の欠如した女性詩においては、リックスが示すような洗練された引喩よりも、単なる引用や言及でしかない場合も多い。それは原始的な「こだま」(echo)でしかないのかもしれない。だが、その影には女性詩人の自我(ego)の叫びが潜伏し、ジェンダーや宗教性に関わるイデオロギーが、その自我(ego)の周りで渦を巻いているのである。文学的遺産が欠如しているなかで、女性詩人は男性的公共圏に参加するために「感受性」という武器を使いながら、広い意味での引喩を用いて男性的世界から批判的距離をとり、女性の文芸共和国を個々に想定し、築き上げようとしたのである。私たちは暗闇の中に錯綜する多層的な女性詩人の「こだま」(echo)の繊細な響きに、そっと耳を傾けなくてはならないのだ。

※本論考は第78回日本英文学会全国大会(平成18年5月19～20日、於中京大学)におけるシンポジウム「詩人の詩人論」で発表した原稿を一部修正したものである。

## 注

- 1) S. T. Coleridge, *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, ed. Earl Leslie Griggs, 6 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1956), 1: 341n, 578.
- 2) S. T. Coleridge, *Lectures 1808-1819: On Literature*, ed. R. A. Foakes, 2 vols. (Princeton: Princeton University Press, 1987), 1: 407; Henry Crabb Robinson, *Henry Crabb Robinson on Books and Their Writers*, ed. Edith J. Morley, 3 vols. (1938; New York: AMS Press, 1967), 1: 62.
- 3) Henry Crabb Robinson, 'Reminiscences', 1: 389 [MS DWL], as quoted in Anna Letitia Barbauld, *The Poems of Anna Letitia Barbauld*, eds. William McCarthy and Elizabeth Kraft (Athens: University of Georgia Press, 1994), 264. バーボールドの詩の引用はマッカーシーが編集したこの版に基づく。
- 4) Paul M. Zallはこの対峙をコウルリッジ側から考察している。'The Cool World of Samuel Taylor Coleridge: Mrs Barbauld and the Building of a Mass Reading Audience', 2/3 (1971): 74-79.
- 5) Christopher Ricks, *Allusions to the Poets* (Oxford: Oxford University Press, 2002), 33.
- 6) Ricks, *Allusions* 33.
- 7) Ricks, *Allusions* 23.
- 8) 'By marriage, the husband and wife are one person in law: that is, the very being or legal existence of the woman is suspended during the marriage, or at least is incorporated and consolidated into that of the husband; under whose wing, protection, and cover, she performs every thing'. William Blackstone, *Commentary on the Laws of England*, 4 vols. (1753; Oxford: Clarendon Press, 1765), 1: 442-45. Mary

- Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Woman*, ed. Miriam Brody (Harmondsworth: Penguin, 1992), 257-58. Susan Stavesは女性の財産権についての法的整備の歴史的過程を、ややフェミニスト的な偏向をかけながらも精査している。 *Married Women's Separate Property in England, 1660-1833* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1990).
- 9) *Quarterly Review* 7(1812): 309; *Universal Magazine* 17 (1812): 217; *Eclectic Review* 8 (1812): 475.
  - 10) Andrew Ashfield (ed), *Romantic Women Poets 1770-1838: Volume 1* (Manchester: Manchester University Press, 1995), 226-27.
  - 11) W. J. Bate, *The Burden of the Past and the English Poets* (Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 1970); Harold Bloom, *The Anxiety of Influence: A Theory of Poetry* (New York: Oxford University Press, 1973). Jonathan Bate, *Shakespeare and the English Romantic Imagination* (Oxford: Oxford University Press, 1986).
  - 12) 18世紀後半から19世紀前半にかけて変化していく読者層と文藝共和国の性質については、Jon P. Klancher, *The Making of the English Reading Audiences, 1790-1832* (Madison, Wis.: University of Wisconsin Press, 1987); Paul Magnuson, *Reading Public Romanticism* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1998); Paul Keen, *The Crisis of Literature in the 1790s: Print Culture and the Public Sphere* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999). もともとワーズワースとコウルリッジの詩における引喩(allusions)、あるいはロマン派におけるミルトン受容など引喩(allusions)の問題に関心を抱いていたLucy Newlynであるが、*Reading, Writing, and Romanticism: The Anxiety of Reception* (Oxford: Oxford University Press, 2000)の第4章、6章では、ジェンダーや歴史状況を考慮しながら解釈学(hermeneutics)や間テクスト性(intertextuality)の観点から女性詩を解釈している。
  - 13) この時代の男性文学の領域における女性の存在についてはMarlon B. Rossの*The Contours of Masculine Desire: Romanticism and the Rise of Women's Poetry* (New York: Oxford University Press, 1989)やAnne K. Mellor, *Romanticism and Gender* (London: Routledge, 1993)の両書が総括的な議論をしている。
  - 14) Mary Wollstonecraft, *The Works of Mary Wollstonecraft*, eds. Janet Todd and Marilyn Butler, 7vols. (London: Pickering, 1989), 7: 252.
  - 15) Paul Langford, *A Polite and Commercial People: England 1727-1787* (Oxford: Clarendon Press, 1989), 461-518; Markman Ellis, *The Politics of Sensibility: Race, Gender and Commerce in the Sentimental Novel* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), 9-23; John Mullan, *Sentiment and Sociability: The Language of Feeling in the Eighteenth Century* (Oxford: Clarendon, 1988), 9-10, 18-56; Gillian Russell and Clara Tuite, 'Introduction' to Russell and Tuite (eds.), *Romantic Sociability: Social Networks and Literary Culture in Britain 1770-1840* (Cambridge: Cambridge University Press, 2002), 9-19; Lawrence E. Klein, *Shaftesbury and the Culture of Politeness: Moral Discourse and Cultural*

- Politics in Early Eighteenth-Century England* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994), 195-212.
- 16) George Barker-Benfield, *The Culture of Sensibility: Sex and Society in Eighteenth-Century Britain* (Chicago: The University of Chicago Press, 1992), 224-31; Langford 109-13; Janet Todd, *Sensibility: An Introduction* (London: Methuen, 1986), 17-21.
- 17) Charlotte Smith, *The Poems of Charlotte Smith*, ed. Stuart Curran (New York: Oxford University Press, 1993), 96-97.
- 18) スミスは1792年に出版した明白に急進的な小説 *Desmond* において、物乞いへの同情を政治的な美德として描写している。
- 19) William Wordsworth, *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797-1800*, eds. James Butler and Karen Green (Ithaca: Cornell University Press, 1992), 234.
- 20) Mary Robinson, *The Poetical Works of the Late Mrs. Mary Robinson: Included Many Pieces Never Before Published*, 3 vols. (London: Richard Phillips, 1806), 3: 309.
- 21) Anna Laetitia Barbauld, *The Works of Anna Laetitia Barbauld, with a Memoir by Lucy Aikin*, 2 vols. (1825; London: Routledge / Thoemmes Press, 1996), 2: 238, 240; Adrew Fuller, *The Calvinistic & Socinian Systems Examined and Compared as to Their Moral Tendency*, 2nd ed. (London, 1794), 41. See also Betsy Rodgers, *Georgian Chronicle: Mrs Barbauld and her Family* (London: Methuen, 1958), 65-66.
- 22) マッカーシーとクラフトによれば、「ネズミの嘆願」は当時の子供たちが暗誦している詩でもあった。Barbauld, *Poems* 245. ひるがえって極端なまでに理知的な男性ユニタリアンであるプリーストリーの目からみれば、「感受性」や「情操」や「共感」、あるいは「社交性」といった感受性用語を頻用したバーボールドの言説は、福音主義的な響きをもち、それは強いては国教会への寝返りのようにさえ映った。Deirdre Coleman, 'Firebrands, Letters and Flowers: Mrs Barbauld and the Priestleys', in Gillian Russell and Clara Tuite (eds.), *Romantic Sociability: Social Networks and Literary Culture in Britain: 1770-1840* (Cambridge: Cambridge University Press, 2002), 84-85. 事実、バーボールド自身、予定論、贖罪や改宗経験の賛美はしないものの、男性ユニタリアンたちの極端な合理主義に対する不信感を、国教会内の福音派 (Evangelicals) と共有していることを認めている。ただし、バーボールドが信仰の感性的要素を肯定し、福音主義的信仰心を認めたとしても、メソジスト派のような極端な福音主義に対しては嫌悪を示している。Rodgers, *Georgian Chronicle* 65-67.
- 23) クラクソンを中心に「奴隷貿易廃止を実現する会」(*The Society for Effecting the Abolition of the Slave Trade*) が結成された1787年頃から、バーボールドやモアを含めた女性たちは、「私も人間であり、兄弟ではないのか?」('Am I not a Man & a Brother?') と奴隷が訴える姿を刻んだウェッジウッド (Wedgwood) のブローチを襟元につけて奴隷貿易廃止のキャンペーンを積極的に推進した。William Roberts, *Memoirs of the Life and Correspondence of Mrs. Hannah More* 2 vols. (London: Seeley, 1834), 2: 71. 感受性に関係する美德が感受性文学を構成する一方で、貧困が社会・政治問題化していく過程で慈善 (charity, philanthropy) と結びついていく。この点についてはBarker-Benfield, *The Culture of Sensibility* 37-103, 215-86; Donna T. Andrew, *Philanthropy and Police: London Charity in the Eighteenth Century* (Princeton: Princeton University Press, 1989), 155-69; David Owen, *English Philanthropy, 1660-1960* (Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard, 1964), 97-119.
- 24) Helen Maria Williams, *A Poem on the Bill Lately Passed for Regulating the Slave Trade* (London: T. Cadell, 1788), 21.
- 25) *Monthly Review* 80 (1789): 237.
- 26) Elizabeth Bentley, *Genuine Poetical Compositions, on Various Subjects* (Norwich: Printed by Crouse and Stevenson for the Authoress, 1791), 22.
- 27) Mary Birkett, *A Poem on the African Slave Trade* (Dublin: J. Jones, 1792), 12.
- 28) Mary Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Woman*, ed. Miriam Kramnick (New York: Penguin, 1975), 143. Daniel E. Whiteは、ウルストンクラフトによるこの批判に対して、バーボールドは感受性言語と理性的言語の融合を戦略的に用いていると擁護する。Daniel E. White, 'The "Joineriana": Anna Barbauld, the Aikin Family Circle, and the Dissenting Public Sphere', *Eighteenth-Century Studies* 32 (1999): 520.
- 29) Barbauld, *Works* 1: xviii.
- 30) 女性の言説の差異化の重要性についてはMary Jacobus, 'The Difference of View', in Mary Jacobus (ed.), *Writing and Writing About Women* (London: Croom Helm, 1979), 10-21.
- 31) Richard Polwhele, *The Unsex'd Females: A Poem, Addressed to the Author of The Pursuit of Literature* (London: Cadell and Davies, 1798), 9-10.

(平成18年11月14日受理)